
ブレイヴ・ロード

みゆあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブレイヴ・ロード

【Nコード】

N2033V

【作者名】

みゆあ

【あらすじ】

ここは、惑星アストラルという1つの世界。

この星では2つの大国、レムステルとフェンネスがあり、昔戦争で争った。当時のアストラルは輝樹と呼ばれる樹がエネルギーを生み出し、人々はそれを生かして生きてきた。しかし、魔物の影響で激減。それが原因で戦争は始まった。そして、戦争を終戦させたのが、聖女フィーナ。彼女は戦死した者の魂「ヒアーライト」と自らの命で大輝樹を作り出す。こうして戦争は終わった。

そして現在。大輝樹を守ることに2国の平和を守ることを目的とした中立派の守護団が結成。リーダーはフィーナの子孫セルツ。そんな中、主人公ライルは幼いころ、両親を亡くしたことをきっかけにセルツに引き取られ、守護団に入団。

そして10年。17歳のライルは同期の親友レックスとともに、祝生祭へ向けての大輝樹の点検を任される。これが新たな真実を知る旅立ちになるとは知らずに・・・

この作品は他の小説投稿サイトにも同じものを投稿しています。

遠い思い出

ここはどこだろう……。真っ暗で何も見えない……。でも、悪い感じはしない。とても暖かい……。

その時、僕の目の前に1つの光が現れた。その希望に満ちた光に僕は手を伸ばす。

（これは……。一体……。？）

子供が3人楽しそうに遊んでいる。同年代ぐらいの子達だろうか。

それは遠くて、とても懐かしい夢。

「ずっと、一緒にいらればいいのに……」

「アイツ」はそう願った。

……。ん？「アイツ」って誰なんだろう？
僕は知らないはずなのに。

そうしているとその光はやがて目の前から遠ざかっていく。

「まって……。！」

僕はまだ離したくない。記憶にすらない、この夢を。

その光が遠くここはどこだろう……。真っ暗で何も見えない……。

でも、悪い感じはしない。とても暖かい……。

その時、僕の目の前に1つの光が現れた。その希望に満ちた光に僕は手を伸ばす。

(これは・・・一体・・・?)

子供が3人楽しそうに遊んでいる。同年代ぐらいの子達だろうか。

それは遠くて、とても懐かしい夢。

「ずっと、一緒にいられればいいのに・・・」

「アイツ」はそう願った。

・・・ん? 「アイツ」って誰なんだろう?

僕は知らないはずなのに。

そうしているとその光はやがて目の前から遠ざかっていく。

「まって・・・!」

僕はまだ離したくない。記憶にすらない、この夢を。

その光が遠くなるにつれて、僕の心は悲しくなった・・・。

「ゴーンゴーン」

早朝6時。朝を告げる鐘が鳴る。

ライルは反射的に身を起こした。目をこすると、僕は泣いていた。

(あの夢・・・一体なんだったんだろう・・・)

とは思ってみるものの、やっぱりよくわからない。

(ま、夢だしな・・・)

あんまり深くは考えなかった。

「さて・・・と。今日も1日ががんばりますか!!」

ライルはベッドの近くに置いた剣を持ち、部屋を飛び出した。

遠い思い出（後書き）

まだまだ未熟ですが、これからがんばります。

守護団にて

ここは守護団本部。守護団というのはレムステルとフェンネスの和平を保つ中立派の組織。

守護団はいくつかの部隊でわかれており、それぞれの役割がある。またクラス制を採用しており、階級が高いほどより高度な任務が任されたりする。

階級はノーマル ブロンズ シルバー ゴールド マスター レジ
エンド

があり、左から順に階級が高くなっていく。

団員たちは胸元にワッペンをつけて、わかりやすくしているのだ。

早朝6時20分。団員達は続々と本部内の朝礼場へ集まる。

朝礼が始まるのは6時30分から。それまでに団員たちは各部隊ごとに整列し、

総部長のセルツを待つ。

（あと10分ぐらいか・・・）

ライルは睡魔に耐えながら立っていた。

そのとき

「よお！ライル！今日もボケた顔してんな」

と背中をバンツと叩かれた。

こんなのはもう慣れっこだ。

「はは・・・レックス、おはよう」

現れたのはライルの親友レックス。髪は肩より少し長めで、頭にバ
ンダナを巻いている。

まさにオールバックだ。彼いわく前髪がじゃまなそうだが、

「何なら坊主にしたら？」

というと怒るのは目に見えている。だから僕は言わない。絶対に。

「ホント元気だな。僕にも分けてよ」

へらつとしてライルは冗談口でいう。

「じゃあわけてやろう。おらおらおらっ!!」

バシバシバシッとまた背中を叩かれた。さすが拳で戦うだけのことはある。

「いたい、いたい、いたい!もう十分だつて!」

「どうせならもみじに・・・」

「いや、ホントにいいです。レックスさん」

?

などと2人が話していると、やがて他の人の声が消えていく。2人も自然と前を向く。

前の部隊にはセルツ総部長と後ろには副官(補佐)のローリエが立つ。

セルツ総部長からは威厳を帯びたオーラが漂う。

・・・立っているだけならば。

セルツは第一声を放つ。

「みんな硬いなあ、朝だからかな？」

何千人ものトップたる人物がこんな穏やかなしゃべりをするなんて・・・

新人たちも啞然としている。僕も最初は驚いた。

はっはっはと言わんばかりにセルツは続ける。

「ま、新人さん達もそう気を張らないで。みんなで今日も1日がんばりましようー！」

という具合で今日の朝礼も終わった。

朝礼が終わると、団員は任務の確認へそれぞれの部隊室へ向かう。本部の向かい側に建っているところだ。ちなみにそのとなりに団員の個室があり、

ここで寝たりする。さらにもう一つ建物がありそこは飛行移動用の機械があり、移動するときに使ったりする。

部隊室ではモニターがあり、そこで任務を確認する。

任務の指令はローリエ副官が行っている。

ライルとレックスは任務の確認をした。

「そうだ。今日は12月31日・・・祝生祭か」
ライルは腕を組んで考えた。

その任務の隣にかっこ書きでこう書いてあった。

（特務指令室へきなさい）

と

「・・・よしっ！行ってみるかあ！」

「そうしよう！」

2人は本部内の特務指令室へと足を進めた。

特務指令

ライルとレックスは特務指令室のドアの前で立ち尽くす。
なにせこんなところにはもっと上のお偉いさんしか入れないと思っ
ていたからだ。

いくらあの穏やかなセルツ総部長であつてもやっぱりここは緊張す
る。

「レ、レックス。先に入つてよ」

するとレックスは視線をそらし、

「なっ・・・こういうのお前のほうが得意だろ!？」

やっぱりレックスも緊張してるんだ。とライルは思った。

「じゃあ、行くよ・・・」ライルは前に立つ。

2人は息を呑んだ。

「ガチャ」

「失礼いたします。第3部隊所属、マスタークラスのライル・エレ
メストです」

続いてレックスも言う。

「失礼いたします。同じくマスタークラスのレックス・オルヴェで
す」

ふとライルは思った。

（あつ！レックス、第3部隊所属のとき、噛むと思って「同じく」
で省略したな？）

横目でレックスを見てやるが、目は合わなかった。そんなに緊張し
てるのか。

すると、ローリエ副官が

「ご苦労様です。こちらへどうぞ」

といい、セルツ総部長が座っているソファの前へと連れていってく

れた。

「おっ！来たね」

いつもの調子のセルツ総部長を見て、ちょっとリラックスできた。

「それじゃあ、さっそく祝生祭から説明しようかな」

祝生祭。話には聞いたことがあった。でもよくは知らなかった。やっぱりそこは、お偉いさんだけの極秘事項というやつなのだろうか。

「じゃあ、その原点から話そうかな」

2人は真剣に話を聞いた。

「人間はね、輝樹から生み出された、エネルギーによって生かされているといわれているんだ」

・・・輝樹。それは人間の生活には欠かせないエネルギーを生み出すもの。

昔、魔物によって激減してしまったのが原因でレムネス戦争がおこったという・・・。

「でも、それは生活に関することなだけで、人間に直接関係することなんですか？」

ライルはそう尋ねると、セルツはソファから立ち上がり、窓から空を見た。

「各地にある輝樹ならちがうけどね。大輝樹だから特別なんだよ」セルツは続ける。

「人間には光が宿っている。やがてその生涯を閉じたとき、光になってあの空に輝くんのだ」

その話を聞いているときのレックスの表情はどこか寂しげだった。
この一瞬だけ。

「それが人の生きた証、魂、それが・・・ヒアーライトと呼ばれて
いるものさ」

「ヒアー・・・ライト」

ヒアーライトは朝でも見える。昼でも夜でも。このアストラルのま
わりにリング状に渦巻いているのだ。

「ヒアーライトは5年たったら、新たな世界や未来に新たな命とし
て生まれ変わっていくんだ」

「その手伝いをしているのが大輝樹ってことさ」

「ええつと・・・その、つまり？」

なかなか把握しきれていないライルは失礼かと思いつつ尋ねた。

「つまり1年に一度、5年たった ヒアーライト達を大輝樹が収束
して、解放をする。この過程を見守るのが守護団の役目。これが祝
生祭なんだよ」

「なるほど！それでモニターに書いてあった大輝樹の点検をする
ということなんですね？」

「そうそう。でも普段は人が入れないように、あそこには結界が張
つてあるんだ」

2人のキヨトンとした表情にセルツはあわてて付け足した。

「その結界を解くには2つの宝石が必要だね。レムステルとフェ
ンネルのそれぞれの首都に住んでいる国王陛下を訪ねてきてほしい
んだ」

「えっ・・・！？僕らがそんな任務を受けていいのですか！？」

「大丈夫、大丈夫。マスタークラスの君たちだからね」

僕たちもこんな風に認めてもらえたなんて・・・。

なんだかすごく嬉しくなった。

レックスもやったな！って顔して笑っている。でも1つ疑問があった。

「どうして、レジエンドクラスの方ではないのでしょうか？」

セルツの表情が一瞬固まった・・・気がした。

「ああ。レジエンドクラスの人には、別の仕事を頼んでいるんだ」

「そうなんですか」

セルツは穏やかな表情で

「誇りに思ってがんばってくれたらそれでいいんだよ」

すかさずレックスは

「そうだって！がんばろーぜ！！」

と言った。

「そうですね。それじゃあまずは首都で宝石を受け取り、そのあとで、中心地にある大輝樹へいけばいいのですね」

「そうそう。それじゃあ、がんばってきてね」

セルツはそういつてほほ笑んだ。

「それでは、失礼します」

「いってきますー！！」

2人はドアを開け、部屋を出た。

そのとき、ローリエが現れ

「いよいよなのね。がんばりなさい」

と声をかけてくださった。

「ありがとうございます」

と一礼してその場を去った。

「ガチャ」

「ん？ああ、ローリエか」

「失礼致します」

セルツは真面目な顔になった。

「ところで、例の組織と人物は？」

ローリエは

「まだ、レジエンドクラスのほうが搜索中です」

「そうか・・・」？

「ですが・・・」

その言葉に何かを感じた。

「どうした？ローリエ」

「総部長が仰られていたように、紺色の髪で容姿が似ている人物と
というのが組織に関わっているという情報が・・・」

「・・・彼が知るにはまだ早すぎる」

「そう・・・ですね」

セルツは言葉なくして、空に輝くヒアールライトを眺めていた。

現れたのは魔物達

まずはレムステルの首都、グランベールへと向かった。移動飛行機は近くの平原へと着地。

すると街の入り口付近に騎士団が集まっている。何やら事件が起こっているらしい。

目を凝らして見てみる。

・・・魔物だ。ざっと十匹はいるだろうか。しかもオオカミ種
の。

「うおっ！魔物がいてやがる！」

「ともかく行ってみよう！」

「くっ……。強い……」

騎士団は押されているようだ。

するとレックスはさらに加速し、拳を振り上げる。

「うおらっ！」

魔物の腹を横から思いつきり、殴る。魔物は消滅。

「おしっ！まずは一体だ！」

茫然とする騎士団にライルは

「ここはまかせてください！」

と言い、横を駆け抜ける。

続いてレックスは二体の魔物を叩く。すると背後から

「ガアアア……！」

という声がした。振り向くと魔物はジャンプして鋭い牙をむき出し、迫っている。

とつさに腕でガードの体制をとった。

その瞬間魔物は動きが空中でピタリと止まった。体は剣が貫いている。

「助かったぜ。ライル」

「戦場は助け合いってことさ」

するとライルの斜め後ろに魔物が迫る。

「ライル!!」

レックスはいち早く叫ぶ。

するとその魔物にもう一本の剣を振りぬく。

そう。ライルは双剣使い。2本の剣を装備している。

ライルはバックステップで体制を立て直し、レックスと背中合わせになった。

周りには五体の魔物がいる。?

「ここからの形勢逆転ができれば上出来だよな!」

レックスはニツと笑った。

「そうだね」

ライルも返した。

沈黙が続く。時が止まったかのように。

「ジャリ」

地面の砂の音をツメでたて、一成に魔物達が襲い掛かる。

その瞬間、円の中心から鋭い閃光と力強い拳の幻影が現れ、魔物を消し去った。

「マスタークラスをなめんなよ!!」

「決まったね」

そう言つて、お互いの顔を見た。これこそ相棒だ。

「あ、ありがとうございます・・・」

騎士団の兵士が一声かける。すると他の兵士たちもよろよろと立ち

あがった。

全員、かるうじて無事なようだ。

「あんまり無理しないでください」

「大丈夫です……。このごろ魔物の問題が深刻なものでして……」

「……魔物。守護団でも問題視としている。ただ
ど解決できないのが現状。ここでも深刻化しているのか……」

「さあ。我々も引き続き、警備にあたるぞ……」

「なっ、そんな体で大丈夫なのか？」

兵士はそんなレックスを見て

「ええ。我々の仕事ですからね……」
と言っ、また警備にあたった。

「仕事……。か。俺たちも今の任務を果たさないと
レックスは兵士達を見やっ、そういった。

「そうだね」

ライルは兵士達を見て

「それじゃあ、失礼します。がんばってください！」
その言葉を聞いた兵士達は一礼した。

2人はグランベールの城へ向かった。

任務達成へ向けて

「お、おい・・・」

「な、何？」

ここはグランベールの街道。さすがは首都だ。活気もあるし、人もいっぱいいる。

しかし、2人は気になっていた。

「人・・・いっぱいいるな」

「うん。いっぱいいるね」

「悪いことじゃねえけど、痛いよなあ・・・」

「人の視線が・・・だね」

道行く人が見てくる。パトロール的なことの任務で守護団の部隊はちよくちよく訪れるわけだが、マスタークラスが訪れることは珍しいのであろう。ワッペンを一目見るとみんな驚いた顔をしている。

「はっはっは！俺たちもお偉いさんだなあ」

「レックス・・・天狗じゃあないんだから鼻伸ばさないでよ」

「そうか・・・やっぱ威厳がないとだめだな！」

レックスは腕を組んで歩き始めた。

「逆効果だよ。顔怖いつて」

2人は冗談を言い合いながら、城へ向かっていく。

グランベールの城玄関前。

すかさず警備していた兵士に捕まった。

「何の御用ですか？」

「僕たちは・・・」

とライルが言いかけるときに兵士はワッペンを見た。すると

「はっ！失礼致しました！話は国王陛下から聞いております。どうぞお通りください」

「ありがとうございます」

「そうか・・・セルツ総部長が事前に連絡しといてくれたんだな」

「みたいだね。じゃ、行こう」

「ギギイ・・・」

ライルは扉をあけた。

「失礼いたします」

2人は律儀に言う。

「どなたかな？」

国王陛下は尋ねる。

「私どもは総部長の命令により参りました。守護団の第3部隊所属、マスタークラスのライル・エレメストと申します」

「同じくマスタークラスのレックス・オルヴェと申します」

「ご苦労であった。わたしはレムステル王国の国王、バルディア・デオ・レムステルと申す」

・・・なんだか一瞬驚いた。セルツ総部長がアレだから、まさに国王という感じがした。

「話はセルツ殿より伺っている。これを受け取りにきたのだろうか？」

国王陛下は高貴な箱を開け、宝石を見せた。

「はい。その通りにございます」

「祝生祭にはあなた方もご出席されるのであろうか？」

「ええ。そう聞いております」

「そうか。がんばりなされよ」

ライルは高貴な箱ごと宝石を受け取った。

「ありがとうございます。それでは失礼いたします」

2人は扉を開けようとした。

「・・・ああ。それと」

「はい。なんですか？」

突然ひきとめられたので、ライルは失礼なことをしてしまったのか

とあせった。

すると国王陛下はほほ笑みながら

「さきほどは魔物を退治してくれてありがとう。感謝している」
ライルはほっとした。

「いいえ。私どもの仕事ですので」
改めて一礼をし、その場を去った。

「紺色の髪的青年・・・」

国王陛下はうつむいて考え込んでいた・・・。

街の外に置いた飛行移動機に乗り込み、次の目的場所、フェンネスの首都であるオールドへ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2033v/>

ブレイヴ・ロード

2011年10月9日14時18分発行